

(添付資料1)

最優秀賞
文部科学大臣奨励賞

命が命を紡ぐ
岩手県一関市立巖美中学校
三年 佐藤 龍太



僕には妹がいる。元気な小学三年生。その元気ぶりは通信簿を見ればよくわかる。去年は皆勤賞。あの記録的な猛暑の夏もへっちゃらだった。

しかし、妹はこれまで辛くて大変な人生を歩んできた。

僕が幼稚園の年長の時生まれた。二つ違いの弟と妹の誕生を心の底から喜んだのも束の間、妹は体調を崩してしまう。近所の小児科から、即、磐井病院に回され検査入院。ここから激闘の日々が始まった。数週間後、北上病院へ、また、数週間後、岩手医大に移送された。病院の規模がだんだん大きくなっていくことに子どもながら気づいた。僕は思いきって両親に聞いてみた。白血病だった。重い病気であることは知っていた。また、骨髄移植が必要だとも教えてくれた。親でも型が一致することは滅多にない。僕は、子どもだし、僕じゃないだろうなと軽い気持ちで血液を採取してみた。何と奇跡は起きた。僕の型が一致したのだ。

この日から月に一度、トレーニングが始まった。血を採られても貧血にならないようにだ。手術一週間前には、完全に学校を休んで入院し、環境を整えた。幼い僕は怖かった。不安だった。でも、妹のためにという気持ちが僕を頑張らせた。残念なことに、僕の骨髄はあまり合わなかったらしく、その後、他の人のと取り換えられたが、少しでも妹に貢献できたことがうれしかった。

現在、妹は抗生物質の影響で白髪交じりの髪で、体には斑点が出ているが、これぞまさしく白血病に勝った証であり、称号である。しかし、たまにじろじろ見られたり、笑われたりするときがある。僕は悲しみにも怒りにも似た複雑な気持ちになるが、今の本人はいつもにこにこ。笑えば笑え。妹が小さな体でどんなに頑張ってきたか、僕たち家族がどんな思いで、妹の病気と闘ってきたか、何も知らないのだから。

僕は、この夏、改めて「命の大切さ」を考えた。今、妹が元気に生きていること、僕が経験した骨髄移植、助かる命と消えゆく命。僕は思わず調べてみた。献血・臓器提供・角膜バンク……。たくさんあることがわかった。献血は十六歳から、臓器提供の意思表示であるドナーカードは十五歳から所持することができる。十代、二十代の人の献血離れが深刻だということも知った。間もなく十五歳の僕にもできることがあることに驚いた。

僕は、毎日をととも平凡に生きている。朝起きて学校に行って、帰って家族と過ごし寝るまでがごく自然に当たり前に過ぎていく。「生きているんだ。」などと実感することもない。おそらく、多くの人がそうだろう。でも、人の命は六十億分の一の確率で誕生してくるのだ。その奇跡の命とともに僕は生きているのだ。妹も生きている。

近い将来、僕は献血に協力していきたいと思う。ドナーにもなりたい。いつの日か、自分の体の一部が他人の体でしっかり働けるように、規則正しい生活を送り、健康を維持していきたい。それが、命をつなぐ一つの方法であり、自分の命を輝かせる一つの道でもあると思う。

妹が入院していた三年間は、母と離れて暮らす寂しさとの闘いでもあった。でも、妹のおかげでたくさんのことを経験できた。病気と闘っている人は山ほどいること。今日も、誰かが悲しみの中で消えゆく命を見つめていること。生きるための希望の光を、すぎるような思いで求めている人がいること。今を生きるということは決して当たり前のことではないのだ。

でも、僕以外の中学生はどうだろうか。僕は、もっともっとたくさんの人達にも考えてほしいし、知ってほしいし、行動を起こしてほしいと思う。そのための学ぶ場が身近にあれば、この命を紡ぐ輪が広がっていくかもしれない。学校では、教科の勉強のほかにも、例えば、職場体験、福祉体験、社会人からの講義、栄養指導、救急方法など、たくさんのことを学んでいる。その仲間に、「ドナー登録制度」や「献血」などについて学ぶ時間が加わることを僕は切望する。自分の命が人の命を輝かせることにつながるなんてすばらしいことではないか。そうと知って行動を起こす人がたくさん出てくると僕は信じている。

僕には、病気を乗り越えた妹がいる。